

環境について
みなさんもう一度真剣に考えてみませんか？

Save The Kikuchi River



「お

たまじやくしはかえるの
子 なまずの孫ではない
わいなオタマジャクシも
ナマズの子も頭が大きく黒くて尻尾が
チヨロチヨロしている点で似ているし、
住んでいる所が同じような所なのでナ
マズの子が1く2センチのころは田ん
ぼの水口や灌漑用の溝などに一緒に遊
んでいるようなところを良く見かけた
ものだから、こんな面白い歌ができた
のだと思います。河川工事が盛んに始
まる前は梅雨時、雨が降って川の水が
増えると用水路から田んぼまで意外と
大きいナマズ、コイ、フナなどがどん
どん上がっていききました。いわゆる「あ
がりいを」で、子供のころはサデ網を
かっいで雨の中を飛び出して行ったも
のです。

腹一杯卵を詰めた魚達はあちこちの
草むらに卵を産み付けてまたサツと川
へ引き上げて行きます。卵が孵化して
小さい稚魚が安全に育つためには日光
が良く当たって水温が上がリ、しかも
大きな魚がやって来ないような浅場
でしか成長できないからです。

戦後食糧難のころ、コイやフナやナ
マズは貴重な蛋白源としての食糧でした。
特にナマズは大きくて見かけによらず
美味な魚で煮付けや蒲焼にして食べた
ものです。ナマズと人間の関わりは深く、

ナマズは信仰の対象となっている地域
もあります。例えば琵琶湖の竹生島神
社ではナマズが龍に変身して島を護っ
ているということです。すぐ近くの星
野村にもナマズを祭つてある神社があ
ります。阿蘇神社の氏子の人達、嘉島
町の鯉地区や宇土市のある地区の人達
もナマズを食しません。

オタマジャクシは両生類ですがナマ
ズは魚類です。中国大陸から朝鮮半島
シベリア、ベトナム、南北アメリカと
広く分布し、種類もいろいろ有ります。
日本に居るのはナマズ、ビワコオナ
マズ、イワトコナマズの3種類でビワ
コオナナマズとイワトコナマズは琵琶
湖とその周辺にしかいません。全国に
居るのはナマズ目ナマズ科ナマズ属です。
他の2種と区別するためマナマズとい
う所もあります。

扁平な頭部と大きな口を持ち長い口
ひげがあります。目は小さく鱗がなく
全体が粘液で覆われています。全体と
して黒色ですが良く見ると粘液の下に
複雑な縞模様があります。長い口ひげ
はナマズ目の特徴です。子魚の間は上
顎に1対下顎に2対ありますが、成長
すると下顎の1対はなくなります。目
が小さく主に夜動き回ることが多いの
で長く発達した触覚の口ひげを利用し
てシピンチャ、エビ、カニ、コンチュウ、

カエルなど動くものを何でも食欲に捕
食します。

江戸時代は地下に居る巨大なナマズ
が怒つて大暴れすると地震が起きると
信じられていたところもあります。今で
もナマズが騒ぎ始めると地震があるとい
う、つまりナマズは地震の予知能力
があるといわれています。ナマズやウ
ナギは電氣的に非常に敏感であるとい
うことは分かっていますし、地電流と
地震とナマズの地震予知との関係を科
学的に研究している大学もあります。
黄河やメコン、アマゾンなどには2メー
トルもあるナマズがいると聞きます。マ
ーク・トウェーンの少年冒険小説「トム・ソー
ヤの冒険」でトム・ソーヤ少年とハッ
クルベリー少年がミシシッピー川でナ
マズ釣りをする時、釣り餌に兎を1匹
ながら付けるのにはびっくりしたもの
ですが、とんとほら話でもないような
気がします。



歴史調査の楽しみ方

日平城跡

9 月下旬から10月中旬にかけ
て、以前から望んでいた井
戸の調査が、環境整備とい
う形でできました。

昭和53年3月のことです。県教委
では、『熊本県の中世城跡』を発売し
ました。城跡の所在地を調べた調査
報告書でした。担当者の一人が駆け
出しの私で、この頃から、日平城跡
の井戸には、大層、興味を持ってい
ました。同書の「直径4m・深さ3m
どんな早魃にも、水は涸れたことは
無い。雨乞い祭りには、井戸の水を
供えると、雨が降ったと伝えられる」
との記事にロマンを感じました。井
戸には、木製品などの遺物も埋蔵さ
れている筈で、日平城跡のタイム・
カプセルともいえる遺構でもありま
した。

日平城跡の調査に着手して程ない
頃に、担当の居石裕臣参事へ、井戸
への思いを伝えました。ところが、
後日、居石さんは「残念ながら」と話
を切り出しました。「地元で尋ねたら
戦前は、定期的に井戸さらいをして
いたという事です」。いささか、夢が
しほみました。世の中、思うように
はいきません。
それから、二年半の歳月が流れて
調査も最終段階を迎えました。益永
浩仁係長と、再度、井戸の取り扱い

について検討を行いました。最後に、
益永さんが結論を下しました。「調査
の閉めとして、地元にお伺いを立
てて、井戸の環境整備を行いますよ
う。現代版の井戸さらいです。この
事で、少しは、井戸の実態も分かる
かも知れません」。

9月26日、作業開始の朝、益永さ
んが、関係者に挨拶をしました。「昔
は、村の若者が、樺一つで、井戸さ
らいをしていたと、区長さんから、
話を伺いました。今日は、井戸が往
時の姿を取り戻します。清酒・白米・
塩で、井戸のまわりを清めました」。

調査には、ある程度の思い込みが
あります。「どんな早魃にも、水は涸
れたことは無い」の記事から、これま
で、私は「湧水を伴う井戸である」と、
信じていました。でも、1日で作業
が終わると、雨水のみを貯めた井戸
であることが、判明したのです。意
外な結果でした。

では、何故に、井戸の雨水は、涸
れしなかったのでしょうか。私と益
永さんは、井戸の縁に座り込んで、
推論を巡らしました。

鍵は、井戸が掘り込まれた土層に
ありました。底部にあたる4層土は
とても硬い灰色土です。水田の床土
に酷似しています。3層土は灰黄褐
色土、2層土は明褐色土。これらは

粘質土です。この状態ですと、漏水
する心配は、まず、ありません。実
際、作業前は、2層土の真中まで、
水が溜まっていた。最も、適し
た場所に、井戸が掘られていたのだ
です。でも、漏
水しなくても
自然蒸発があ
ります。です
から、早魃の
時にも水が涸
れない謎は、
残ったままで
す。

余談があり
ます。10月初
旬に、補充調
査に向きま
した。実は、

前夜に、少し雨が降りました。結果
として、この朝、井戸に、深さ30cm
の雨水が溜まっていた。それが、
今も、涸渇していないのです。伝説
は生きていました。(続く)

大田 幸博

(元・菊水町史編集委員会副委員長)



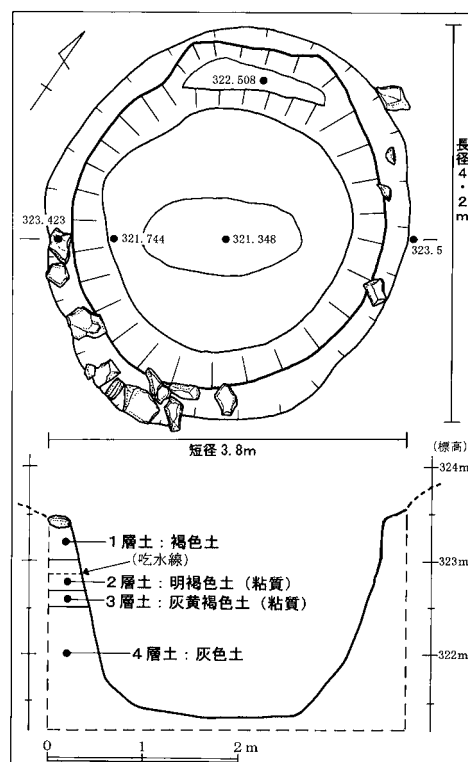
作業前



作業中



作業終了



井戸実測図および断面図